◆旧大乗院庭園の調査 ―第310次

1．はじめに

(財)日本ナショナルトラストによる大乗院庭園整備のための事前調査である。大乗院庭園の調査は昨年度までに園池南岸から東岸、北岸へと展開し、遺構を保存した上で、護岸工事や近代の盛土の撤去工事、植栽工事などを順次行なっている。今年度は入江や岬を含む園池西岸中央部周辺の調査である(図45)。

大乗院庭園については、森蘊氏をはじめとする研究の蓄積があり、文献や絵画、そして現地踏査をふまえた復元案が提示されている。それによれば、当該調査地区は平安時代以降明治時代まで大乗院の中心建物群が存在した場所の東側と考えられる。庭園の全景を描いた、江戸時代の成立とされる「大乗院四季真景図」(以下、真景図と略)には、変化に富んだ「小池」が描かれ、その実態の把握が整備復元事業においても重要であった。

また、尋尊の著した『大乗院寺社雑事記』文明十七年四月一日の条には、池中の北中島の南西部分に「上古の井戸」が存在したことが記載されており、今回の調査区がこの位置に近いことから、井戸の確認も課題としてあげられた。

これらの条件を考慮した結果、調査区は入江を挟む北側の岬部分(以下、北区と呼称)と南側の岬部分(以下、岬区と呼称)、および小池西側の平坦部分(以下、南区と呼称)を中心に設定した。また、園池の排水をおこなった結果、南の岬の東側で円形の落ち込みの存在が認められたことから、井戸の痕跡と考え、周囲を土嚢で囲み、調査を行なうこととした(以下、池中央区と呼称)。なお、発掘調査の途中で小池の池岸の確認と改変の状況を探るために北区と南区の間にそれぞれ拡張部を設けた(図46)。

合計の調査面積は約600m²で、調査期間は2000年1月7日から3月24日である。

2．検出遺構

北区

SX7660　地山削り出しの基盤の上に明灰白砂を盛り築成した岬。この砂層の中から土師器皿が大量に出土した。これらは完形かそれに近いものが多く、また重なり合った状態で出土するものもあり、岬構築の盛土時に廃棄されたものと考えられる。

SX7665　東大池に面した池岸。石を斜面に沿って乱雑に据えている。盛土と割石による1974年の整備土の下より検出した。

SX7666　SX7665の東側に続く石敷の池底。基盤層である大阪層群に起源を持つと考えられる径約2～5㎝の礫を青灰砂質土の地山に叩き込む方法で施工されている。これに伴う遺物は見られず、施工の時期は不明である。この石敷は調査区内一面に広がっており、範囲の確認など今後の調査が必要である。

SX7661　SX7660の中央部にある南北方向に並ぶ石組。楕円形に近い形状の石を主に東西方向に長軸を揃え配されている。SX7660の築成土、明灰白砂による整地に先行すると考えられる。一部に大きな石を抜き取った痕跡があり、ある段階で破壊されている。これを園路と理解する意見もあるが、かなりの凹凸があることから、その可能性は低い。むしろ、岬の最も高い位置に存在することから庭園の景観を構成する何らかの施設の基礎であったと考えたい。

SX7662　岬の整地状況を確認する目的で調査区北側を掘り下げたところ、明灰白砂の下より検出した石敷。使用されている石材は石組SX7661と共通するが、一回り小型の石が用いられており、検出面の高さにも差が見られる。一連のものである可能性が高いが、石組周辺部分の個所が削平されて残存していないため確実ではない。

SG7650　入江の北岸で埋まった状態で検出した池。室

図46　第310次調査遺構平面図　1：200

図47　石組SX7661（北から）

図48　西小池SG7651（北から）

町時代の西小池か。土師器を含む粘質土で埋め戻されている。この埋土は岬の構築土の可能性もあり、池の規模や時期については今後の調査での検討が必要である。

また、北区南西隅の拡張部ではSG7650の東岸にあたる石組護岸SX7641を検出した。

南区

SG7650　南区北東隅の拡張部では現状の岸より２ｍ程西で、石組護岸SX7642を検出。対岸のSX7641とは約５ｍ離れ、SG7641が狭まったことがわかる。

SG7651　「真景図」等の史料より森蘊氏が復原推定した近世の西小池。東岸部分を検出した。石を用いた護岸SX7640は幅２ｍ前後で北東より南西方向に蛇行しながら続いている。この護岸は構築時に地山を削り出した後、粘質土による裏込めを施し、その上に石を組んでいる。岸際が特に深く掘り下げてあるのが特徴的である。構築の年代については確定できない。護岸石の間から寛永通宝が出土した。

SE7635　径0.8ｍ、深さ0.8ｍの石組の井戸。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、西小池護岸SX7642に近接することや、近世の西小池護岸SX7640にとりつく東西溝SX7631に破壊されていることから近世の改変以前に遡る可能性がある。

SD7631　南区北端で検出された素掘りの東西溝。SE7635を破壊して掘られ、西小池に通じる。溝の底は池の底とほぼ同じ高さであり、両側の池を結ぶ水路であったと考えられる。

SD7630　断面逆台形、素掘りの東西溝。南区西端部での溝底の高さは東大池からの取水部と比べると15㎝程低く、西へ排水していたことがわかる。ある時期に半ばの深さまで青灰粘土で埋め戻されている。新しい溝の埋土には近現代の建築廃材等が多量に含まれ、現代の整地がおこなわれた段階で廃絶して埋め戻されたと考えられる。新しい時期の溝底には掘形をもつ杭が残り、護岸か橋の一部になると思われる。溝内からは混入したと思われる木簡が出土したが、文字の判読はできなかった。

SX7647　近代の建物の基礎。出土状況から壁に煉瓦を用いた建物と考えられる。

SX7646　近代の便所跡。壁以上の部分は残存しないが、甕を２基並べ、周囲を漆喰状の物質で固めている。

SA7645　調査区北東隅で検出した。北から２間南へ伸び、西に１間分屈曲する塀。近代の便所の目隠し塀であろう。

岬区

SD7633・7634　素掘りの東西溝で、南区東西溝SD7630

表8　第310次調査出土瓦塼類集計表
6BGN-B·C

図49　第310次調査 出土遺物　1：4

の延長部。池との取りつき部分では旧溝SD7634と、新溝SD7633の2時期がある。旧溝はやや東南方向に屈曲する。その後、陶製土管を暗渠として用いたSD7632に改修している。最終的には暗渠の両端を木の蓋で閉塞している。

SX7670　地山削り出しの基盤の上に北区と近似する明灰白砂を積んで築成した岬。先端部東側では布掘の堀形を掘削して南北方向に直線的な石組SX7671がある。「真景図」にみえる橋の痕跡は確認できていない。周辺の大ぶりな石の大半は池の浚渫土の上にあり、昭和の整備の際に据えたものである。汀線付近の冠水する個所には樹木の株が遺存する。

SE7675　岬先端部南側で検出した径約1.5mの井戸。井戸枠は遺存していない。発掘が進むにつれ崩落が激しくなったため十分な調査ができなかったが、内部から斎串、須恵器壺が出土した。位置から考えても東大池の形成以前に使用されていたものである可能性が高い。

池中央区

SX7679　幅が5mをこえる浅い溝。発掘調査のため水を抜いたところ、池底に直径8m前後のゆるやかな円形の落ち込みに、周辺の白色砂の底と異なる青灰色・暗褐色の粘土が堆積していた。井戸である可能性を念頭に調査したが、自然流路であることがわかった。

3．出土遺物

各調査区から多量の遺物が出土した。ほとんどは近現代の整地に伴う遺物であり、陶磁器類や煉瓦等の建築資材が多い。ここでは庭園に関連する資料として井戸SE7675出土遺物と岬SX7660出土土器の概要について述べる。

井戸SE7675出土遺物（1～3）　斎串が2点出土した（1・2）。上部を圭頭に削ぎ、下部先端を尖らせた板の側面に切り込みをいれたものである。井戸の底近くの砂層から出土。

須恵器長頸壺（3）は小型のもので、口縁部は打ち欠かれて現存しない。肩部には灰白色の自然釉がかかる。

岬SX7660出土土器（4～14）　岬を構築している明灰白砂中より瓦器と、多量の土師器が出土した。瓦器（4）は断面逆三角形の高台をもつ。土師器は橙赤色を呈する個体がほとんどで、赤みをおびた白色を呈するものも存在する。器壁は厚手で口縁部はナデにより調整されている。他には口縁部を内に強く屈曲させる形態のものも存在する（14）。瓦器・土師器の年代から岬の形成は13世紀頃とすることができる。　（金田明大）

瓦塼類　出土した瓦塼類は表8の通り。中・近世の瓦が大半を占め、次いで、近代の瓦も多く出土した。古代の軒瓦は非常に少ないが、注目されるものとして、北区青灰土より四重弧文軒平瓦が出土した。顎は貼り付け段顎で、顎面に2条の凹線がある。白鳳時代のものと思われ、

図50　大乗院四季真景図（森家蔵）

これまで大乗院で出土した瓦の中で最も古い。この地に大乗院が移転する以前の元興寺禅定院に関連するものか。なお、元興寺極楽坊所蔵品中にも四重弧文軒平瓦がある。

また、「BIZEN日INBE」のスタンプがある近代の煉瓦が北区からまとまって出土した。これらは岡山県備前市伊部地区の生産品である。（清野孝之）

4．成果についての検討

「大乗院四季真景図」との比較　真景図は大乗院庭園の景観を描写した森家蔵、柳生家蔵、奈良ホテル蔵などの若干内容を異にする絵画の総称として用いられている。これらは大乗院第15世である隆温によるものと伝えられているが、製作経緯や新旧関係には不明な点も多い。ここでは森家蔵の真景図（図50）と比較検討してみよう。

今回の調査区周辺の陸地、景石、構造物を抜き出して調査成果との対応図を作成した（図51）。これをもとに比較を行ってみたい。

地形測量と現地の詳細な観察にもとづく森蘊氏の復元案では、東西溝SD7630の存在は認識されていなかった。しかし、今回の調査成果を踏まえて真景図を検討すると、石の板橋がかかった水路が該当部分に存在しており、これをSD7630と考えると近世には西小池、東大池とこの溝に画された島が存在したことがわかる。

また、石組SX7661にあたる位置には大型の石が配された築山が存在したことがわかり、石組はその一部を構成するものであった可能性が高い。

拡張区の調査によってそれほど変化なく遺存していると思われた西小池の入江部分は、実際には現在の幅より約1.5倍の幅を持つ広いものであったことがわかる。現地においてもこの成果をもとに見直したところ、不自然に岸が張り出している部分やえぐれている部分が存在し、近代以降に改変がおこなわれたことがわかる。真景図でもこの部分をやや広めに描いており、詳細に実際の景観を観察していたことがうかがえる。

このように真景図に描かれた景観と今回の調査成果は一致するところが多い。今後、真景図と調査成果の比較対照によって遺構の位置付けと資料批判を相補的におこなう必要があるだろう。

SD7630の変遷　上述したように東西溝SD7630は近世には存在していたと考えられるが、ある段階において途中まで埋め戻されている。どちらの溝も東から西へ流下する。しかし開削当初の溝底の高さは近世に拡張された

西小池の底よりもかなり低く、明らかに池からの排水を意図したものといえる。これを真景図にみられる両池をつなぐ水路として考えるには無理がありそうだ。埋戻し後の溝底の高さは西小池の底に近く、西小池の拡張にあわせて改修された結果が真景図の状況であろう。

真景図を検討すると、池の水は西小池の北西から流れ出し、大乗院西側を流れる尾花谷川へと排水されている。しかし、西小池拡張以前の排水路は未確認であった。今回の調査により、SD7630が当初東大池の排水路であった可能性が指摘できる。

その後、西小池の南西方向への拡張と中心建物群の北西への移動といった大幅な刷新によって排水路が当初の機能を喪失し、一部が庭園を構成する要素として庭園に取り込まれたと考えたい。

5．まとめ

大乗院の中心部分は多くの研究業績が蓄積されてきたが、発掘調査による所見を新たに検討材料として加えることができたことは大きな成果であった。今後、この成果を庭園研究や大乗院庭園の整備に大いに活用を図っていく必要がある。近代以降、大乗院庭園の近景部分は大きく改変されており、その実態は発掘調査によって明らかにしていく必要がある。東大池西側の調査は継続しておこなわれる予定であり、更なる研究の進展が期待できるものと思われる。（金田）

図51　真景図と調査区の対照

平　城　専（こらむ）欄　①

◆平城宮造営尺長について

奈良時代の尺度に関しては、大宝令大尺、小尺の理解をめぐっての議論があるが、それはさておくことにして、その尺度の実長について整理しておきたい。宮本長二郎氏によれば、平城宮朱雀門等の宮城諸門、大垣の造営尺は0.2945m～0.2958mであり、「第一次内裏（推定）」における奈良末期の遺構の造営尺は0.2990m～0.3021mの現尺に近い値を得て、全般的には8世紀初期の9寸7分台から、8世紀末期の9寸9分台まで年代を追って尺が伸びる傾向にあるという。

私は、かつて、平城京条坊について検討した際に、宮西面大垣の玉手門と佐伯門の南北心々間距離から得た1尺＝0.2961mを基準尺長として念頭においた。その後、格段に進捗した平城宮の調査成果の中から、造営計画の基本的な骨格となるような大区画施設の遺構を対象にして尺長を算出すると、朱雀門～第一次大極殿院南門：0.2962m。壬生門～第二次大極殿院南門：0.2963m。内裏区画第Ⅰ期の南北長：0.2953m。同東西長：0.2952m。第二次大極殿院の下層における（下層）朝堂院区画の東西長：0.2950m。第二次大極殿院の下層南北長：0.2959mとなる。

こうしてみると、平城宮造営当初での1尺は、0.2950mから0.2963mの間にあることがわかる。8世紀の中で尺長が長くなるという通説に対しては別に検証の機会をもちたいが、たとえば第二次大極殿院の第Ⅱ期（740年代後半）での区画東西長からは0.2957m。平城遷都直後の造営である内裏Ⅲ期の区画南北長からは0.2952m、同東西長0.2947mという尺長が得られる。これらのデータによる 限り、8世紀中頃にあっては、尺長はむしろ短い傾向を示しているといえる。（井上和人）